

大学院奨励研究員研究報告書

2026 年 3 月 25 日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	徐 筱琦	印
-----	------	---

指導教員

所属・職名	言語コミュニケーション 文化研究科・教授	
氏 名	于 康	印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	日本語における名詞句に後接する「のこと」の使用条件に関する言語学的研究
採用期間	2025 年 4 月 1 日 ～ 2026 年 3 月 31 日

研究科委員長・研究科長印	研究科受付印

提出先： 所属研究科事務

※所属研究科→研究推進社会連携機構（大学院）

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

(1) 学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名	徐筱琦	論文題目	クオリア構造からみる「NPをVP」と「NPのことをVP」との異同に関する一考察—「忘れる」を手掛かりに—		
	雑誌名	日语偏误与日语教学研究		巻号	発行年月	掲載頁
				第十輯	2025年9月	133-155

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
				担当箇所：		

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

(2) 学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本語学会	開催地	名古屋大学
題目	思考動詞と共起する「NPのこと」の使用メカニズム—「考える」を手掛かりに—	発表年月日	2025年5月10日

学会名	日本語誤用と日本語教育学会	開催地	中国・上海財経大学
題目	「思い出す」と共起する「NPのこと」の使用条件に関する一考察	発表年月日	2025年10月25日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

【本研究の概要】

日本語において、「こと」は名詞句に後接して「NPのこと」という表現となり、文の目的語の位置に現れる場合があるが、それが常に無条件に使用されるわけではなく、日本語学習者の作文においては「NPのこと」の誤用がしばしば観察される。「NP」と「NPのこと」の使用条件について、従来の研究は、甲を表す場合に「NP」、乙を表す場合に「NPのこと」といった二項対立的な枠組みに収まると論じているが、いずれの説においても説明できない母語話者の用例が見られる。また、「NP」と「NPのこと」の意味的な相違についてある程度解釈しているが、なぜそのような解釈ができるのかに関する理論的な説明はほとんどなく、それぞれの研究者の直感に基づくもののようにも見受けられる。これらの問題を究明しなければ、日本語母語話者がどのような条件で「NPのこと」を使用しているのか、さらに、学習者の用例がいかなる意味的規則に反しているために誤用と判断されるのかを明らかにすることはできない。そこで、本研究は、日本語における名詞句に後接する「のこと」の使用条件を解明し、その結果を踏まえ、日本語母語話者と日本語学習者が「NPのこと」をどのように捉えているのかに着目し、日本語学習者による「NPのこと」の誤用が生起する要因を明らかにすることを目的として研究を行った。具体的な研究手順は以下の通りである。

- ①意味論的立場に立ち、「NPのこと」と述語との意味関係から、「NPのこと」の使用条件を明示する。
- ②「クオリア構造」という理論的枠組みを用い、名詞句に内在する意味的制約から、「NPのこと」における「のこと」の生起条件を明確にする。
- ③上記①および②の考察を踏まえ、中国語母語話者日本語学習者の誤用例を対象に誤用分析を行い、日本語母語話者と日本語学習者における「NPのこと」の捉え方の相違を明確にするとともに、日本語学習者による「NPのこと」の誤用が生起する要因を究明する。

博士学位申請論文の構成は、以下の通りである。

第1章 序論

第2章 先行研究とその問題点

第3章 述語との意味関係からみる「NPのこと」の使用条件

第4章 名詞句の意味的制約からみる「NP」と「のこと」との共起条件

第5章 「NPのこと」に関する学習者の誤用の要因

第6章 結論

以下、博士論文の各章の内容を説明する。

第1章では、本研究の背景および問題提起と研究の目的について述べる。具体的には、名詞句に後接する「のこと」を対象に、従来の研究で明らかにされている点と残された課題を述べたうえで、本研究の目的と研究方法を明確にする。それを踏まえ、本研究で扱うデータ、術語の定義および論文の構成を述べる。

第2章では、先行研究を整理し、その問題点を指摘する。具体的には、母語話者における「NPのこと」の使用条件に関する先行研究と、学習者の「NPのこと」の誤用に関する先行研究を取り上げ、未だ解明されていない問題点の指摘を行う。

第3章では、研究対象となる述語を分類したうえで、「NPのこと」と述語との意味関係から、述語の類型ごとに「NPのこと」の使用条件を考察する。

第4章では、「NPのこと」の使用において名詞句に内在する意味的制約がいかに関与するのかについて、クオリア構造という枠組みを用いて、先行研究の説明を再解釈したうえで、第3章考察されてきた「NPのこと」における「のこと」の生起条件を理論的に明らかにする。

第5章では、第3章と第4章で明らかにした「NPのこと」の使用条件を踏まえ、『YUK作文コーパス』における学習者による「NPのこと」の不使用と過剰使用に関する誤用例を対象とし、学習者と母語話者における「NPのこと」の捉え方の相違に着目し、学習者の「NPのこと」の誤用の要因を解明する。

第6章では、結論と今後の課題について述べる。

以上を踏まえて、本研究の結果、以下の点が明らかになった。

①日本語母語話者における「NPのこと」の使用条件は、各類型の述語とその目的語である名詞句との意味関係に基づいて整理できる。「NP」と「NPのこと」の区別は必ずしも明確ではなく、それぞれに固有の指示範囲がある一方で、両者が重なり合う部分も存在する。

②「クオリア構造」という理論的枠組みを用いることで、先行研究において論じられてきた「のこと」の生起に関する意味的制約を説明できるだけでなく、名詞句と述語との意味関係による「のこと」の生起も、「NP」の指示対象がそのクオリアのどの部分に該当するかによって説明することができる。さらに、「NP」と「NPのこと」の指示範囲に基づく「のこと」の生起条件についても、理論的に解明することが可能となった。

③日本語母語話者においては、同一の述語に対して「NP」と「NPのこと」の両形式が使用可能であるのに対し、日本語学習者においては、いずれか一方の形式の使用が誤用とされる場合が観察される。本研究は、この誤用の生起が、名詞句と述語との意味関係、「NP」と「NPのこと」の指示範囲、ならびに述語の意味的性質に関する捉え方において、日本語学習者と日本語母語話者の間に存在する相違に起因すると捉える。

今後の課題として、本研究は、「NPのこと」の使用条件を理論的に説明するにあたり、クオリア構造がある程度有効であることを示したものの、クオリアとして記載すべき情報に関する認定基準について、より客観的な根拠を明示し、理論の精緻化を図る必要がある。また、より一般化した使用条件を明らかにするためには、本研究で扱っていない述語や構文類型における「NPのこと」の使用条件の解明も、今後の課題として挙げられる。さらに、日本語教育の現場への貢献を目指すうえで、日本語学習者の誤用のメカニズムの解明は重要な課題であり、今後さらに検討していく必要がある。

【本研究の経過】

2025年4月の時点では、第1章と第2章、すなわち問題提起と先行研究に関する内容の執筆はすでに完成していた。第3章については、述語との意味関係からみる「NPのこと」の使用条件に関する考察を進めており、学会発表または投稿論文を通じて、その一部は完成した。そのうち、投稿論文「心理動詞と共起する『NPのこと』の使用条件に関する一考察—学習者の誤用を手掛かりに一」は、日本語誤用と日本語教育学会発行の学会誌『日语偏誤与日语教学研究（第九輯）』に掲載され、2025年10月に同学会の学会賞三等賞を受賞した。奨励研究員の期間（2025年4月～2026年3月）には、第3章の一部と、第4章と第5章を書き下ろしたうえで、第6章を執筆した。

博士学位論文をまとめるにあたり、研究成果に基づく学会発表や投稿論文の作成も行った。例えば、第3章の一部を取り上げ、2025年5月に開催された日本語学会2025年度春季大会において「思考動詞と共起する『NPのこと』の使用メカニズム—『考える』を手掛かりに一」をテーマに口頭発表を行った。また、2025年10月に開催された2025年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウムでは、「『思い出す』と共起する『NPのこと』の使用条件に関する一考察」をテーマに発表を行い、ドクターフォーラム優秀発表賞を受賞した。さらに、第4章の一部は、「クオリア構造からみる『NPをVP』と『NPのことをVP』との異同に関する一考察—『忘れる』を手掛かりに一」と題する投稿論文として、『日语偏誤与日语教学研究（第十輯）』に採用され、2025年9月に刊行された。

博士学位申請論文「日本語における名詞句に後接する『のこと』の使用条件に関する言語学的研究」は、2025年9月29日に提出した。その後、2025年12月19日に開催された口頭試問を経て、2026年1月28日に開催された所属研究科委員会において、博士学位の授与が承認された。この場をお借りして、本研究の遂行にあたり、各方面からご支援を賜りました関西学院大学大学院に、厚く御礼申し上げます。